

第三〇章の抜粋

P609

「信用制度に関してこれからわれわれが近づいてゆく無類に困難な問題」

①貨幣資本の蓄積はどの程度まで現実の資本蓄積の指標であるのか？

②貨幣逼迫はどの程度まで現実資本の欠乏を表しているのか？

「われわれがこれまで貨幣資本および貨幣財産一般の蓄積の特有な形態を考察してきたかぎりでは、この形態は、結局は労働にたいする所有の請求権の蓄積ということになった。」

P610

会社事業の所有権は現実資本に対する権利であるが、「この資本にたいする自由処分力を与えるものではない。この現実資本を引きあげることはできない。その所有権は、ただ、この現実資本によって獲得されるべき剰余価値の一部分にたいする請求権を与えるだけである。」この権利は「現実資本の紙製の複製」(＝利子生み資本)である。

P611 **重要**

「それ(利子生み資本——青山)の価値額は、すなわち取引所でのその相場づけは、利潤率の低下が貨幣資本の特有な運動にはかかわりなく利潤率の傾向的低下の単なる結果であるかぎり、この利潤率の低下につれて必然的に上がる傾向がある。したがって、価値表現から見ればその可除部分のそれぞれが一定の元来の名目的価値をもっているこの想像的な富は、すでに前述のような理由からも、資本主義的生産の発展の歩みのなかで膨張してゆくのである。」

「この投機が労働に代わって資本所有の本来の獲得方法として現われ」

P611-612

「貨幣資本の蓄積とは、一方の私的貨幣資本家と他方の国家や自治体や再生産する借り手とのあいだに立つ媒介者としての銀行業者(職業的な貨幣の貸し手)の手のなかでの富の蓄積のこと」

これから取り扱うテーマ

「この(産業家や商人が必要とする——青山)貸付資本の蓄積こそは、われわれがここで取り扱わなければならないものであり、しかもそれは特に貸付可能な貨幣資本の蓄積である。」「ここでは、ただ、媒介者としての銀行業者によって産業家や商人に与えられる貨幣貸付だけを問題にするのである。」(P612)

商業信用の分析

「といっても、われわれはこの点(商業信用)もあらかじめもっと詳しく研究しなければならない。」(P612)

「そこで、まず第一に、商業信用、すなわち再生産に携わっている資本家たちが互いに与え合う信用を分析してみよう。」

「この純粋な商業信用の循環については」、「第一に、このような相互の債券の決済は、資本の還流にかかって」おり、「第二に、この信用制度は、現金支払いの必要をなくしてしまうものではない。」(P613-614)だから、「この商業信用にとっての限界は、それ自体と

して見れば、(1)産業家や商人の富、すなわち還流が遅れた場合の彼らの準備資本処分力であり、(2)この還流そのものである。」(P615)

「信用は、量的には生産の価値量の増大につれて増大し、時間的には市場がますます遠くなるにつれて長くなる。ここでは相互作用が行なわれる。生産過程の発展は信用を拡大し、そして信用は産業や商業の操作の拡大に導くのである。」(P615)

「再生産の循環のなかの信用——銀行業者信用は別として——が多いということは、貸付のために提供されていて有利な投下を求めている遊休資本が多いということではなくて、再生産過程で資本が大いに運用されているということである。」(P617)

「還流が遅れ、市場は供給過剰になり、価格は下落し、その結果として停滞が現れるならば、そこにはすでに産業資本の過剰がある。といっても、それは産業資本がその機能を果たすことができなくなるという形での過剰である。」(P617)

信用は再生産過程の膨張とともに膨張し、再生産の停滞とともに収縮する。

「そこで、再生産過程のこのような膨張に攪乱が生ずれば、またはただその正常な緊張に攪乱が生じただけでも、それとともにまた信用の欠乏も現れる。」(P618)

「労働者たちの消費能力は、一方では労賃の諸法則によって制限されており、また一方では、労働者は資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりでしか充用されないということによって制限されている。すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはり、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのであって、この衝動は、まるでただ社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとするのである。」(P619)

「ところが、いま、この商業信用に本来の貨幣信用が加わる。」

その結果、「一部はただの融通手形やりくりによって、また一部はただ手形づくりを目的とする商品取引によって、全課程が非常に複雑にされるのであって、外観上はまだ非常に堅実な取引と順調な還流とが静かに続いているように見えても、じつはもうずっと前から還流はただ詐欺にかかった金貸業者とか同じく詐欺にかかった生産者とかの犠牲によって行なわれているだけだということにもなるのである。それだから、いつでも事業は、まさに破局の直前にこそ、ほとんど過度にまで健全に見えるのである。」(P619)

「そこでまた貨幣資本の蓄積に帰ることにしよう。」

「貸付可能な貨幣資本の増加は、必ずしも現実の資本蓄積または再生産過程の拡張を示しているのではない。」「恐慌を切り抜けた直後には貸付資本が大量に遊休し」、「一般に利子率の水準が低い」。これは、「産業資本の収縮と麻痺とによる貸付可能資本の増加にほかならないのである。」(P620)

「1847年の恐慌のおもな原因の一つは、市場の非常な供給過剰と対東インド商品取引での無際限な詐欺的思惑だった。」

「再生産過程が、再び、過度な緊張の状態の直前の繁栄状態に達したならば、商業信用は非常に大きく膨張するのであるが、その場合、この膨張には、実際に再びまた、円滑に行なわれる還流と拡大された生産という「健全な」基礎があるのである。この状態では、利子率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。じっさい、この時期こそは、低い利子率、したがってまた貸付可能な資本の相対的な豊富さが産業資本の現実の拡張と一致すると言える**唯一**の時点なのである。商業信用の拡大と結びついた還流の容易

さと規則正しさとは、貸付資本の供給を、その需要の増大にもかかわらず、確実にして、利率の水準が上がるのを妨げる。他方、こうなると、準備資本なしに、またはおよそ資本というものなしに、事業をし、したがってまったく貨幣信用だけに頼って操作をする騎士たちが、ようやく目につくようになってくる。いまではまた、あらゆる形での固定資本の大拡張や、新しい巨大な企業の大量設立が加わってくる。そこで、利率はその平均の高さに上がる。そして、利率が再び最高限度に達するのは、新しい恐慌が襲ってきて、急に信用が停止され、支払が停滞し、再生産過程が麻痺し、前に述べたような例外はあるにしても、貸付資本のほとんど絶対的な欠乏と並んで遊休産業資本の過剰が現れるようになるときである。」(P624-625)

「利率に表される貸付資本の運動は概して、産業資本の運動とは反対の方向に進むのである。」(P625)

①産業循環の発端では低い利率と産業資本の収縮とが同時に現れ

②恐慌後の「好転」の時期は、最低限度よりは高い利率であるが、この低い利率は、商業信用がまだ自分の足で立っているのだからわずかな度合いでしか銀行信用を必要としないということを表している。

③利率がその平均的な高さ、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階

この、②と③の二つの時期だけが、豊富な貸付資本と産業資本の大膨張とが同時に現れる場合を示している。

「過剰生産と幻惑的景気との時期には、生産は生産諸力を最高度に緊張させて、ついには生産過程の資本主義的制限をも越えさせてしまうのである。」

④循環の終わりには高い利率と産業資本の過剰豊富とが同時に現れる

「この産業循環は、ひとたび最初の衝撃が与えられてからは同じ循環が周期的に再生産されざるをえないというようになっている。」(P625)

産業循環の周期について

マルクスは、産業循環の周期について、第一部の注で、「競争に加わる工業国の数が十分なものになったとき、このとき以来はじめてかの絶えず再生産される循環は始まった」こと、その循環の終点として一般的恐慌があること、「これまでのところでは、このような循環の周期の長さは10年か11年であるが、しかし、この年数を不変なものとするべき理由はなにもない。反対に、いまわれわれが展開してきたような資本主義的生産の諸法則からは、この年数は可変だということ、そして、循環の周期はしだいに短縮されるということ、これを推論せざるをえないのである。」と述べていますが、エンゲルスは優しく次のように訂正しています。

「従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現れる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。世界貿易の幼年期だった一八一五～一八四七年には、ほぼ五年の循環周期を指摘することができる。1847～1867年には循環周期は明確に一〇年である。われわれは前代未聞の激しさの新しい世界恐慌の準備期にあるのだろうか？いろいろなことがそれを暗示しているように思われる。」(P626)

実に卓見である。マルクス・エンゲルス・レーニンに対して、鬼の首でも取ったかのように嘯みつく不破さんとは大違いだ。

全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われる 全恐慌の基礎

「恐慌期には支払手段が欠乏しているということは自明である。」「1844/45年のそのような無知でまちがった銀行立法がこの貨幣恐慌をひどくすることもありうる。」(P626)

「再生産過程の全関連が信用を基礎としているような生産体制のなかでは、急に信用が停止されて現金払いしか通用しなくなれば、明らかに、恐慌が、つまり支払手段を求めての殺到が、起こらざるをえない。だから、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われるのである。……しかし、これらの手形の多くは現実の売買を表しているのであって、この売買が社会的な必要をはるかに超えて膨張することが結局は全恐慌の基礎になっているのである。……とにかく、ここではすべてがゆがんで現れるのである。なぜならば、この紙の世界ではどこにも実在の価格やその実在の諸契機は現れないのであって、ただ、地金や硬貨や銀行券や手形や有価証券が現れるだけだからである。ことに、国内の貨幣取引の全部が集中する中心地、たとえばロンドンでは、このような転倒が現れる。全課程がわけのわからないものになる。生産の中心地ではそれほどでもないのであるが。」(P627)

商品資本は、「潜勢的な貨幣資本としては、それは不断の膨張収縮を免れない。」(P627)
恐慌の最中の、「このような物価崩落は、ただ以前の価格膨張を埋め合わせるだけである。」(P628)

「信用とそれに伴う一般的な価格膨張とによって助長された過剰生産」(P629)

株式の価格は、「一部は、その株式を支払指図証とする収入が減少したために、また一部は、その株式が非常にしばしば山師的な性質の企業を代表しているために、低落する。……とはいえ、相場表のなかでこのような有価証券の貨幣名が下落するということは、それらが表している現実資本とはなんの関係もないのであり、反対にその所有者たちの支払能力には大いに関係があるのである。」(P631)

第三〇章の概略

第二九章で見た「銀行資本の諸成分」の市場での機能をより深く論究し、①貨幣資本の蓄積はどの程度まで現実の資本蓄積の指標であるのか？、②貨幣逼迫はどの程度まで現実資本の欠乏を表しているのか？、という問題を「産業循環」のなかで見ていく。

これから取り扱うテーマ

貨幣資本の蓄積とは、一方の私的貨幣資本家と他方の国家や自治体や再生産する借り手とのあいだに立つ媒介者としての銀行業者(職業的な貨幣の貸し手)の手のなかでの富の蓄積のことである。「この(産業家や商人が必要とする——青山)貸付資本の蓄積こそは、われわれがここで取り扱わなければならないものであり、しかもそれは特に貸付可能な貨幣資本の蓄積である。」ここでは、ただ、媒介者としての銀行業者によって産業家や商人に与えられる貨幣貸付だけを問題にする。

商業信用の分析

といっても、われわれはこの点(商業信用)もあらかじめもっと詳しく研究しなければな

らない。そこで、まず第一に、商業信用、すなわち再生産に携わっている資本家たちが互いに与え合う信用を分析してみよう。

この純粋な商業信用の循環については、第一に、このような相互の債券の決済は、資本の還流にかかっており、第二に、この信用制度は、現金支払いの必要をなくしてしまうものではない。だから、「この商業信用にとっての限界は、それ自体として見れば、(1)産業家や商人の富、すなわち還流が遅れた場合の彼らの準備資本処分力であり、(2)この還流そのものである。」(P615)

「信用は、量的には生産の価値量の増大につれて増大し、時間的には市場がますます遠くなるにつれて長くなる。ここでは相互作用が行なわれる。生産過程の発展は信用を拡大し、そして信用は産業や商業の操作の拡大に導くのである。」再生産の循環のなかの信用——銀行業者信用は別として——が多いということは、貸付のために提供されていて有利な投下を求めている遊休資本が多いということではなくて、再生産過程で資本が大いに運用されているということである。「還流が遅れ、市場は供給過剰になり、価格は下落し、その結果として停滞が現れるならば、そこにはすでに産業資本の過剰がある。といっても、それは産業資本がその機能を果たすことができなくなるという形での過剰である。」信用は再生産過程の膨張とともに膨張し、再生産の停滞とともに収縮する。再生産過程の膨張に攪乱が生ずれば、またはただその正常な緊張に攪乱が生じただけでも、それとともにまた信用の欠乏も現れる。

ところが、いま、この商業信用に本来の貨幣信用が加わると、その結果、「一部はただの融通手形やりくりによって、また一部はただ手形づくりを目的とする商品取引によって、全課程が非常に複雑にされるのであって、外観上はまだ非常に堅実な取引と順調な還流とが静かに続いているように見えても、じつはもうずっと前から還流はただ詐欺にかかった金貸業者とか同じく詐欺にかかった生産者とかの犠牲によって行なわれているだけだということにもなるのである。それだから、いつでも事業は、まさに破局の直前にこそ、ほとんど過度にまで健全に見えるのである。」(P619)

ここでまた貨幣資本の蓄積に帰ることにしよう

労働者たちの消費能力は、一方では労賃の諸法則によって制限されており、また一方では、労働者は資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりではしか充用されないということによって制限されている。すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはり、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのであるが、この衝動は、まるでただ社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとするのである。資本主義的生産様式における「産業循環」のなかでの商業信用と貨幣資本の変化を見てみよう。

産業循環の発端の時期の商業信用と貨幣資本

恐慌を切り抜けた直後には貸付資本が大量に遊休し、産業循環の発端では低い利率と産業資本の収縮とが同時に現れ、商業信用は収縮している。これは、「産業資本の収縮と麻痺とによる貸付可能資本の増加にほかならないのである。」(P620)

好転の時期と過度な緊張の状態の直前の繁栄状態の時期の商業信用と貨幣資本

「再生産過程が、再び、過度な緊張の状態の直前の繁栄状態に達したならば、商業信用は非常に大きく膨張するのであるが、その場合、この膨張には、実際に再びまた、円滑に行

なわれる還流と拡大された生産という「健全な」基礎があるのである。この状態では、利率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。じっさい、この時期こそは、低い利率、したがってまた貸付可能な資本の相対的な豊富さが産業資本の現実の拡張と一致すると言える**唯一**の時点なのである。商業信用の拡大と結びついた還流の容易さと規則正しさとは、貸付資本の供給を、その需要の増大にもかかわらず、確実にして、利率の水準が上がるのを妨げる。」(P624)

②恐慌後の「好転」の時期は、最低限度よりは高い利率であるが、この低い利率は、商業信用がまだ自分の足で立っているのでわずかな度合いでしか銀行信用を必要としないということを表している。

③利率がその平均的な高さ、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階

この、②と③の二つの時期だけが、豊富な貸付資本と産業資本の大膨張とが同時に現れる場合を示している。

繁栄状態から過度な緊張の状態へ

「他方、こうなると、準備資本なしに、またはおよそ資本というものなしに、事業をし、したがってまったく貨幣信用だけに頼って操作をする騎士たちが、ようやく目につくようになってくる。いまではまた、あらゆる形での固定資本の大拡張や、新しい巨大な企業的大量設立が加わってくる。そこで、利子はその平均の高さに上がる。」

恐慌への道、循環の終わり

過剰生産(信用とそれに伴う一般的な価格膨張とによって助長された過剰生産＝市場の非常な供給過剰)と商品取引での無際限な投機的思惑を秘めた幻惑的景気との時期には、生産は生産諸力を最高度に緊張させて、ついには生産過程の資本主義的制限をも越えさせてしまうのである。「そして、利子が再び最高限度に達するのは、新しい恐慌が襲ってきて、急に信用が停止され、支払が停滞し、再生産過程が麻痺し、前に述べたような例外はあるにしても、貸付資本のほとんど絶対的な欠乏と並んで遊休産業資本の過剰が現れるようになるときである。」循環の終わりには高い利率と産業資本の過剰豊富とが同時に現れる。商業手形の多くは現実の売買を表しているのであって、この売買が社会的な必要をはるかに超えて膨張することが結局は全恐慌の基礎になっているのであるが、「再生産過程の全関連が信用を基礎としているような生産体制のなかでは、急に信用が停止されて現金払いしか通用しなくなれば、明らかに、恐慌が、つまり支払手段を求めての殺到が、起こらざるをえない。だから、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われるのである。」**全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われる。**このように、「恐慌期には支払手段が欠乏しているということは自明である。」しかし、「1844/45年のそのような無知でまちがった銀行立法がこの貨幣恐慌をひどくすることもありうる。」(P626)

なお、商品資本は、「潜勢的な貨幣資本としては、それは不断の膨張収縮を免れない。」恐慌の最中の、「このような物価崩落は、ただ以前の価格膨張を埋め合わせるだけである。」(P628)

この産業循環は、ひとたび最初の衝撃が与えられてからは同じ循環が周期的に再生産されざるをえないというようになっている。貸付可能な貨幣資本の増加は、必ずしも現実の資本

蓄積または再生産過程の拡張を示しているのではない。利率に表される貸付資本の運動は概して、産業資本の運動とは反対の方向に進むのである。

架空資本と恐慌

とにかく、ここではすべてがゆがんで現れるのである。なぜならば、この紙の世界ではどこにも実在の価格やその実在の諸契機は現れないのであって、ただ、地金や硬貨や銀行券や手形や有価証券が現れるだけだからである。

会社事業の所有権(株式としての利子生み資本)は現実資本に対する権利であるが、この権利は「現実資本の紙製の複製」であり、「この資本にたいする自由処分力を与えるものではない。この現実資本を引きあげることはできない。その所有権は、ただ、この現実資本によって獲得されるべき剰余価値の一部分にたいする請求権を与えるだけである。」

「それ(利子生み資本——青山)の価値額は、すなわち取引所でのその相場づけは、利潤率の低下が貨幣資本の特有な運動にはかかわりなく利潤率の傾向的低下の単なる結果であるかぎり、この利潤率の低下につれて必然的に上がる傾向がある。したがって、価値表現から見ればその可除部分のそれぞれが一定の元来の名目的価値をもっているこの想像的な富は、すでに前述のような理由からも、資本主義的生産の発展の歩みのなかで膨張してゆくのである。」「この投機が労働に代わって資本所有の本来の獲得方法として現われ」る。

その株式の価格は、「一部は、その株式を支払指図証とする収入が減少したために、また一部は、その株式が非常にしばしば山師的な性質の企業を代表しているために、低落する。……とはいえ、相場表のなかでこのような有価証券の貨幣名が下落するということは、それらが表している現実資本とはなんの関係もないのであり、反対にその所有者たちの支払能力には大いに関係があるのである。」

産業循環の周期について

マルクスは、産業循環の周期について、第一部の注で、「競争に加わる工業国の数が十分なものになったとき、このとき以来はじめてかの絶えず再生産される循環は始まった」こと、その循環の終点として一般的恐慌があること、「これまでのところでは、このような循環の周期の長さは10年か11年であるが、しかし、この年数を不変なものとするべき理由はなにもない。反対に、いまわれわれが展開してきたような資本主義的生産の諸法則からは、この年数は可変だということ、そして、循環の周期はしだいに短縮されるということを経験せざるをえないのである。」と述べていますが、エンゲルスは「従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長く決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現れる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。世界貿易の幼年期だった一八一五～一八四七年には、ほぼ五年の循環周期を指摘することができる。1847～1867年には循環周期は明確に一〇年である。われわれは前代未聞の激しさの新しい世界恐慌の準備期にあるのだろうか？いろいろなことがそれを暗示しているように思われる。」と優しく訂正しています。マルクス・エンゲルス・レーニンに対して、鬼の首でも取ったかのように噛みつく不破さんとは大違いです。

「第三〇章」の要約と現代の私たちが留意すべき点

「第三〇章」の要約

第三〇章は、「産業循環」のなかでの「現実の資本」の行動と第二十九章で見た「銀行資本の諸成分」の動きと信用の展開——商業信用と利子生み資本の膨張と収縮——について、主として論じたものです。

その前提としての、商業信用とその延長線上の「商業証券、手形」のより詳しい論述と「利子付証券」の論述を見てみましょう。

商業信用の分析

商業信用にとっての限界は、①産業家や商人の準備資本処分力であり、この還流そのものであること、②生産過程の発展は信用を拡大し、信用は産業や商業の操作の拡大に導くこと③再生産の循環のなかの信用——銀行業者信用は別として——は、再生産過程の膨張とともに膨張し、再生産の停滞とともに収縮すること。再生産過程の膨張に攪乱が生ずれば、それとともにまた信用の欠乏も現れるということ④ところが、この商業信用に本来の貨幣信用が加わると、一部はただの融通手形やりくりによって、また一部はただ手形づくりを目的とする商品取引によって、全課程が非常に複雑にされ、外観上はまだ非常に堅実な取引と順調な還流とが静かに続いているように見えても、じつはもうずっと前から還流はただ詐欺にかかった金貸業者とか同じく詐欺にかかった生産者とかの犠牲によって行なわれているだけだということにもなるということ。⑤それだから、いつでも事業は、まさに破局の直前にこそ、ほとんど過度にまで健全に見えるのである。

信用による流通過程の短縮による架空の需要が恐慌の原因であるという不破さんの「恐慌の運動論」なるものは、この商業信用の機能を唯一の恐慌の原因と捉える、マルクスの「産業循環論」の一部しか見ることのできない極めて偏狭な考えです。

利子生み資本の分析

会社事業の所有権(株式としての利子生み資本)は現実資本に対する権利であるが、この権利は「現実資本の紙製の複製」であり、この資本にたいする自由処分力を与えるものではない。この現実資本を引きあげることはできない。その所有権は、ただ、この現実資本によって獲得されるべき剰余価値の一部分にたいする請求権を与えるだけである。利子生み資本の価値額は、つまり取引所でのその相場づけは、利潤率の傾向的な低下につれて、現実資本の増加につれて必然的に上がってゆく。この想像的な富は、資本主義的生産の発展の歩みのなかで膨張してゆく。

この利子生み資本による投機が労働に代わって資本所有の本来の獲得方法として現われる。

しかし、ここで、「利子生み資本」について「第二十九章」で述べられていて、私が下記のように要約した文章を、もう一度、見て下さい。

——「利子生み資本」は、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品となる。その市場価格は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動する。この商品の市場価格は、ただ現実の収入によってだけでなく、予想され前もって計算された収入によって規定されているから、ある程度まで投機的である。

また、資本主義的信用制度のもとで二倍にも三倍にもなった信用の結果、「現金、すな

わち金または銀行券」として持っている銀行の準備金は貨幣の逼迫の時期には対応できない。だから、貨幣市場の逼迫の時期にはこのような有価証券の価格は二重に下がる。……だから、このようなもとでの、信用破綻もまた、「幻想的である」。――

このような株式の価格は、「一部は、その株式を支払指図証とする収入が減少したために、また一部は、その株式が非常にしばしば山師的な性質の企業を代表しているために、低落する。……とはいえ、相場表のなかでこのような有価証券の貨幣名が下落するということは、それらが表している現実資本とはなんの関係もないのであり、反対にその所有者たちの支払能力には大いに関係があるのである。」

「産業循環」のなかでの「現実の資本」と「貨幣資本」

マルクスは、すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはり、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのであるが、この衝動は、まるでただ社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとすることを述べ、資本主義的生産様式における「産業循環」、真の意味での「恐慌の運動」のなかでの現実の資本と商業信用・信用と貨幣資本の様態を論及しています。

産業循環の発端の時期の商業信用と貨幣資本

恐慌を切り抜けた直後には貸付資本が大量に遊休し、産業循環の発端では低い利子率と産業資本の収縮とが同時に現れ、商業信用は収縮している。これは、産業資本の収縮と麻痺とによる貸付可能資本の増加にはかならない。

好転の時期と過度な緊張の状態の直前の繁栄状態の時期の商業信用と貨幣資本

再生産過程が、再び、過度な緊張の状態の直前の繁栄状態に達すると商業信用は非常に大きく膨張するが、この膨張には円滑に行なわれる還流と拡大された生産という「健全な」基礎がある。この状態では、利子率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。商業信用の拡大と結びついた還流の容易さと規則正しさが、貸付資本の供給を、その需要の増大にもかかわらず、確実にして、利子率の水準が上がるのを妨げる。この時期こそは、低い利子率、したがってまた貸付可能な資本の相対的な豊富さが産業資本の現実の拡張と一致すると言える唯一の時点である。

恐慌後の「好転」の時期は、最低限度よりは高い利子率であるが、この低い利子率は、商業信用がまだ自分の足で立っているのでわずかな度合いでしか銀行信用を必要としないということを表している。この時期と利子率とその平均的な高さ、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階の時期の二つの時期だけが、豊富な貸付資本と産業資本の大膨張とが同時に現れる場合を示している。

繁栄状態から過度な緊張の状態へ

このような時期になると、準備資本なしに、またはおよそ資本というものなしに、事業をし、したがってまったく貨幣信用だけに頼って操作をする騎士たちが、ようやく目につくようになってくる。この時期には、あらゆる形での固定資本の大拡張や、新しい巨大な企業の大量設立が加わってくる。そこで、利子はその平均の高さに上がる。

恐慌への道、循環の終わり

信用とそれに伴う一般的な価格膨張――なお、商品資本は、潜勢的な貨幣資本として不断の膨張収縮を免れず、恐慌の最中の物価崩落は、ただ以前の価格膨張を埋め合わせるだけなのであるが――とによって助長された過剰生産(=市場の非常な供給過剰)と商品取引

での無際限な投機的思惑を秘めた幻惑的景気の時期は、生産諸力を最高度に緊張させて、ついには生産過程の資本主義的制限をも越えさせてしまう。そして、利子が最高限度に達するのは、新しい恐慌が襲ってきて、急に信用が停止され、支払が停滞し、再生産過程が麻痺し、貸付資本のほとんど絶対的な欠乏と並んで遊休産業資本の過剰が現れる時である。循環の終わりには高い利子率と産業資本の過剰豊富とが同時に現れる。

商業手形の多くは現実の売買を表しており、この売買が社会的な必要をはるかに超えて膨張することが結局は全恐慌の基礎になっているが、再生産過程の全関連が信用を基礎としているような生産体制のなかでは、急に信用が停止されて現金払いしか通用しなくなれば、明らかに、恐慌が、つまり支払手段を求めての殺到が、起こらざるをえない。だから、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われるのである。

このように、恐慌期には支払手段が欠乏しているということは自明であるが、しかし、1844/45年のそれのような無知でまちがった銀行立法がこの貨幣恐慌をひどくすることもありうる。（貨幣価値の下落を防ぐために、保有する金の量と貨幣の量との連動性を厳しく守る立法を行なったことを指す。）

なお、マルクスは「第三六章」で、「銀行と信用とは、資本主義的生産をそれ自身の制限をのりこえて進行させる最も強力な手段となり、恐慌や思惑の最も有効な媒介物の一つとなるのである。」（大月版『資本論』Ⅲ P782-3）と述べています。

現代の私たちが留意すべき点について

この資本主義的生産様式における産業循環は、ひとたび最初の衝撃が与えられてからは同じ循環が周期的に再生産されざるをえないようになっているます。

現代の産業循環においては、信用による価値実現の短縮（商品資本が最終的に売れていないのに貨幣資本となって価値実現されること）による架空の需要はかなりの程度コントロールされていますが、市場で取引される「利子生み資本」の価格は、予想され前もって計算された収入（現代の会計の言葉でいえば、時価評価にもとづく時価会計）によって規定されるので、資産価値の増大とリンクして相乗効果を発揮する「利子生み資本」＝「架空資本」の価格の膨張が「産業循環」のピークを演出します。この点で、不破さんの言う「恐慌の運動論」なるものは、現実を正しく反映したものではありません。

産業循環の周期について

マルクスは、産業循環の周期について、第一部の注で、「これまでのところでは、このような循環の周期の長さは10年か11年であるが、……循環の周期はしだいに短縮されるということを推論せざるをえないのである。」と述べていますが、エンゲルスは「従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現れる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。世界貿易の幼年期だった一八一五～一八四七年には、ほぼ五年の循環周期を指摘することができる。1847～1867年には循環周期は明確に一〇年である。われわれは前代未聞の激しさの新しい世界恐慌の準備期にあるのだろうか？いろいろなことがそれを暗示しているように思われる。」と優しく訂正しています。マルクス・エンゲルス・レーニンに対して、鬼の首でも取ったかのように噛みつ

く不破さんとは大違いです。

なお、現代では短い景気循環が3年程度の周期で繰り返されており、長期の景気循環の最近のピークはリーマン危機の前ですが、100年に一度と言われたリーマン危機は「ヘリコプターベン」と世界の成長エンジンとなった中国の財政出動によって救われました。

不破さんの「恐慌の運動論」の行き着く先

マルクスが「恐慌や思惑の最も有効な媒介物の一つ」と言った「銀行と信用」の一部を抽出して、価値実現の短縮による架空の需要が恐慌の元凶のように言う不破さんは、資本主義的生産様式の矛盾を正しく認識することができないので、次の「第三章」の「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(大月版『資本論』⑤ P641)という文章から、資本主義に対するとんでもない理解に到達します。

しかしそれは、次の「第三章」を見るなかで、みなさんと一緒に見ていきましょう。